

精神的豊かさを志向する時代へのシフト

近年、幸せや満足の度合いを「見える化」する試みが国内外で活発化しています。

国外では2011年に経済協力開発機構（OECD）が、幸福に必要不可欠な11項目の状況を計測し、日本を含む40か国の暮らしを比較できる「より良い暮らし指標（Better Life Index：BLI）」を公表しました。

国内では内閣府が2021年9月に、国民の生活満足度に影響を与えていると考えられる11分野と、各分野の満足度に関連が深い客観的指標群を選定し「Well-beingダッシュボード」として公表しました。また、2021年6月には政府の各種基本計画等にWell-beingに関するKPIを設定することが閣議決定されるなど※1、幸せや満足の度合いを指標で「見える化」し、それらを政策立案に活用する取組は今後益々重要になると考えられます。

本県が考える「幸せ」と「いばらき幸福度指標」の導入

茨城県は平成30年より「活力があり、県民が日本一幸せな県」を基本理念に掲げ、県民一人ひとりが未来に希望を持つことができ、自身のなりたい自分

像に向かって一歩でも二歩でも近づいていけることを「幸せ」と定義し、そのような環境を整備・充実させるために様々な政策を推進してきました。しかし、この「日本一幸せ」が抽象的な概念に留まっていることが課題となっていました。

そのため令和4年度からの県総合計画では、県独自の幸福に関する尺度を作り、本県が考える幸福の実現状況を「見える化」することとしました。それが「いばらき幸福度指標」です。

「いばらき幸福度指標」の選定と県民の幸せ実感

いばらき幸福度指標は政府統計などに基づく客観的指標を中心に構成しています。もちろん幸福度の把握には、個人の主観的な幸福感が重要であることは言うまでもありません。先に述べたOECDや内閣府の指標も、客観的指標と主観的幸福感を組み合わせて作成されています。

しかし、何を幸福と感じるかは一人ひとりの価値観によって異なり、さらに年齢やライフステージによっても変化する多様なものです。ポジティブ心理学を提唱したマーティン・セリグマン氏によると、人は「人生にどれくらい満足しているか」と



いばらき幸福度指標のロゴマーク

いう問いに対し、7割以上が「その時の気分」によって回答を決めるとされています※2。このように、主観的幸福感は把握や経年で比較することが非常に難しいものです。そのため本県では、まずは内閣府の先行研究などを参考に、主観的な幸福感と関連があるとされる客観的指標を多く活用し、幸福度を把握することとしました。

今後はこの指標により「日本一幸せな県」の実現状況を数値化し、全国との相対的な比較を行います。それを基に過去の政策の成果を確認し、これからの政策の方向性を検討していくとともに、指標を通して県民の皆さんに茨城県の豊かさ・暮らしやすさを実感していただき、更なるチャレンジを続けていきたいと願っています。

※1：経済財政運営と改革の基本方針2021

※2：マーティン・セリグマン著・宇野カオリ監訳「ポジティブ心理学の挑戦 “幸福”から“持続的幸福”へ」（2014年）

